

パイプラインの強化で、2026/12期以降毎年1製品の上市を掲げ、回収フェーズへの早期の移行を目指す

■ 会社概要

デ・ウエスタン・セラピテクス研究所（略称：DWTI（デューティー）、以下同社）は、三重大学発の創薬バイオベンチャーで、眼科疾患の治療薬開発に注力している。DWTIグループは「日本発の画期的な新薬を世界へ」という理念のもとに設立以来、プロテインキナーゼ阻害剤開発の研究から得られた独自の基盤をもつ科学技術に基づいて、医薬品候補の研究開発に取り組んでいる。すでに4製品を上市しており、わが国において数少ない、上市実績を有する創薬ベンチャーである。

■ 2026/12期の連結業績予想

2026/12期の連結業績予想は300百万円(前期比22.6%減)、営業損失780百万円、経常損失800百万円、当期純損失800百万円である。売上高は主に、眼科手術補助剤ブリリアントブルーG（BBG）、緑内障治療剤グラアルファ®のロイヤリティ収入である。BBGについては、2025年12月の米国以外の海外特許満了によるロイヤリティ収入の減少を見込んでいる（国内については独占的ノウハウライセンス条項付製品供給契約により影響はない）。また、緑内障治療剤グラナテック®の海外ロイヤリティも2025年に終了した。

■ 市場性の高い開発パイプライン

2025年7月、同社は新規パイプラインとしてH-1129の開発を決定した。また、2026年3月には、千寿製薬株式会社と資本業務提携を締結し、米国向けに開発していたH-1337について日本でも開発を進めることになった（日本での上市を優先）。H-1337は緑内障治療剤であり、対象となる患者数は日本では推定400万人で米国の同420万人とほぼ同水準で市場性は高い。また、DWR-2206やK-321など既存の治療薬がなく製品の大型化が期待できる角膜内障害に対する治療薬の開発パイプラインも有している。

■ 株価インサイト

同社は「キナーゼ阻害剤のパイオニア」であり、自社発明の上市薬を有する数少ない創薬ベンチャーである。2026年以降、毎年1製品の上市を計画している。この計画は、同社のキナーゼ阻害剤の可能性に裏打ちされた「創薬エンジン（新薬を継続創出できる当社の基盤技術）」と戦略的なパイプラインポートフォリオによるものである。市場性の高い開発パイプラインを有していることも特色である。現在は、開発費用先行の業績となっているが、上市が計画どおり進捗すれば、創薬ベンチャーとしての投資家の期待がさらに高まり、株価に反映されていくものとSIRでは考える。

決算期	売上高 (百万円)	YoY (%)	営業利益 (百万円)	YoY (%)	経常利益 (百万円)	YoY (%)	当期純利益 (百万円)	YoY (%)	EPS (円)	DPS (円)
2022/12期	448	8.1	-305	--	-295	--	-429	--	-14.50	0.00
2023/12期	428	-4.4	-798	--	-796	--	-812	--	-25.56	0.00
2024/12期	471	10.1	-1,209	--	-1,228	--	-1,290	--	-36.74	0.00
2025/12期	387	-17.8	-619	--	-630	--	-632	--	-13.19	0.00
2026/12期(会予)	300	-22.6	-780	--	-800	--	-800	--	-14.75	0.00

出所：同社有価証券報告書および決算短信よりSIR作成

注：SIRでの財務データ処理は短信規定と異なるため記載数字は会社資料と相違することがある。

Full Report



注目点

緑内障や高眼圧症などの眼科疾患のキナーゼ阻害剤メカニズムの研究開発と治療薬の創製に強みを持つ創薬バイオベンチャー。ビジネスモデルを導入品開発とコラボ創薬・共同開発などでまで拡大。

主要指標

株価 (4/10)	93
52週高値 (25/9/26)	181
52週安値 (26/3/23)	91
10年間高値 (17/2/21)	857
10年間安値 (24/8/5)	60
発行済株式数(百万株)	56,982
時価総額 (十億円)	5.299
企業価値 (十億円)	4.194
25/12 株主資本比率	66.2%
25/12 実績ROE	--
25/12 実績PBR	3.69x
26/12 予想PER	--
26/12 予想EV/EBITDA	--
26/12 予想配当利回り	--

株価チャート(1年)



出所: TradingView

アナリスト 大下 敬勇

research@sessapartners.co.jp



本レポートは当該企業からの委託を受けてSESSAパートナーズが作成しました。詳しくは巻末のディスクレーマーをご覧ください。

目次



サマリー	1
会社概要	3
事業概要	4
株主の状況	7
上市品	8
ビジネスモデル	9
研究開発の特徴	10
研究開発体制	13
2025/12期通期業績	15
2026/12期通期業績予想	17
トピックス①	18
トピックス②	19
眼科用医薬品市場（注力領域）	20
緑内障の市場	21
角膜内障害の市場	22
開発パイプラインの進捗計画	23
各開発パイプラインの概要	24
株価インサイト	29
Appendix	30

会社概要

DWTIグループの本社および研究所

Japan Innovative Therapeutics
日本革新創薬株式会社（連結子会社）
ロート製薬 ロートリサーチビレッジ京都

名古屋本社

三重大学大学院 医学系研究科

出所：同社IR資料よりSIR作成

代表取締役社長
日高 有一氏



DWTI 会社概要

	内容
商号	株式会社デ・ウエスタン・セラピテクス研究所 略称「DWTI（デューティー）」
事業分野	医薬品研究開発
設立	1999年2月26日
資本金	697百万円（2025年12月末日現在）
本社	名古屋市中区錦一丁目18番11号
代表取締役社長	日高 有一
開発研究所	三重県津市栗真町屋町1577三重大学大学院医学系研究科・医学部 産学官連携講座 臨床創薬研究学講座
従業員数（同社）	19名、役員6名（2025年12月末日現在）
関係会社	日本革新創薬株式会社（連結子会社） 略称「JIT（ジット）」

出所：同社ウェブサイト

事業概要

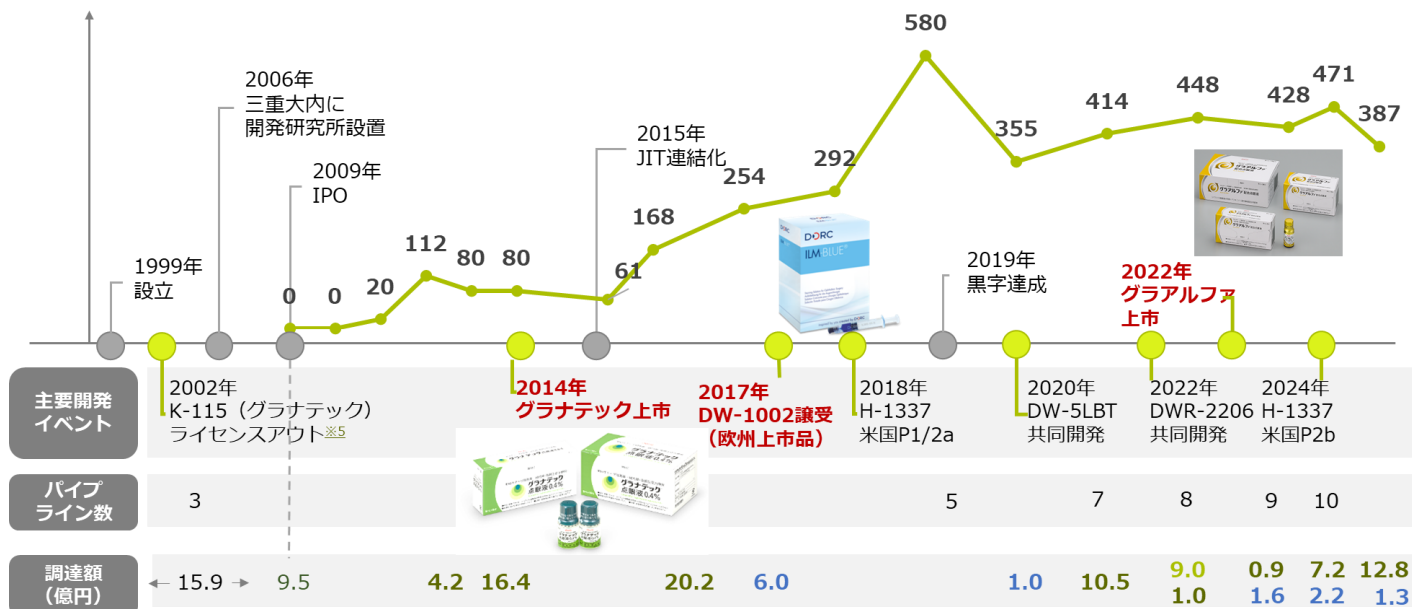
ビジネスモデルの進化、強み

DWTIは三重大学発の創薬バイオベンチャーで、眼科疾患の治療薬開発に注力している。DWTIグループは「日本発の画期的な新薬を世界へ」というビジョンのもとに設立以来、プロテインキナーゼ阻害剤開発の研究から得られた独自の基盤をもつ科学技術に基づいて、医薬品候補の研究開発に取り組んでいる。リード化合物は、数十年にわたって蓄積された化合物ライブラリーの中から開発候補を選定し、効率的なドラッグデザイン力で最適化する。そして「ドラッグ・ウエスタン法」によって作用メカニズムを明らかにし、ターゲットを決定する。当初のビジネスモデルは、自社開発品を開発の早い段階で製薬会社に導出し、収益を得ることに主眼を置いていた。

しかし、医薬品候補が承認されるまでには一般的に10年かかり、膨大な研究開発費が必要にもかかわらず成功確率が低く、開発初期段階で着実に赤字になるため、2014年にグラナテック®の発売が成功した後に戦略を転換し、基礎研究の特化から自社開発とライセンス取得に注力した。

こうした経緯を経て、現在、DWTIの強み・特徴として挙げられるのは、①基盤技術：自社発明の上市品により実証された高い創薬力、②注力領域：眼科領域に注力したパイプライン、③開発体制：自社臨床開発を推進できる体制・ノウハウ、の3点である。

DWTI沿革



2005年～2009年IPO前の調達合計（IPO時の目論見書より記載）

調達額の表記について、手法の色分けは次のとおり 第三者割当増資 公募増資 **フロント** CB 借入

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」



グラナテック®点眼液0.4%



TissueBlue™
眼科手術補助剤



グラアルファ®配合点眼液



会社沿革

年月	出来事
1999年2月	医薬品研究開発を目的とした、有限会社デ・ウエスタン・セラピテクス研究所を愛知県名古屋市の設立（資本金5百万円）
2002年9月	興和株式会社とK-134（閉塞性動脈硬化症）の開発および実施契約、K-115（緑内障・高眼圧症）の開発および実施契約を締結
2004年11月	有限会社より株式会社へ組織変更（資本金10百万円）
2006年12月	国立大学法人三重大学と産学官連携講座共同研究契約を締結し、同大学内に「臨床創薬研究学講座」を開設
2009年10月	ジャスダック証券取引所NEO（現 東京証券取引所 グロース市場）に株式上場
2014年12月	グラナテック®点眼液0.4%（開発コード：K-115）（緑内障・高眼圧症）の国内上市
2015年6月	眼科用治療剤の日本における独占的実施権を取得する導入契約を締結（開発コード：DW-1001）
2015年11月	日本革新創薬株式会社を連結子会社化
2017年4月	BBG250を含有する眼科手術補助剤にかかる事業の譲受（開発コード：DW-1002）
2018年3月	当社初の自社開発品として、H-1337（緑内障・高眼圧症）の米国第Ⅰ相/前期第Ⅱ相臨床試験開始
2018年9月	H-1337（緑内障・高眼圧症）の米国第Ⅰ相/前期第Ⅱ相臨床試験終了
2019年8月	リバスジル塩酸塩水和物のフックス角膜内皮変性症を対象疾患とする米国第Ⅱ相臨床試験のIND申請（治験許可申請）（開発コード：K-321）
2019年12月	ロート製薬株式会社とDW-1001の日本における独占的実施権を許諾するライセンス契約を締結
2020年2月	緑内障治療剤の配合剤（リバスジル塩酸塩水和物とプリモニジン酒石酸塩）の国内第Ⅲ相臨床試験開始
2020年4月	眼科手術補助剤DW-1002（製品名：TissueBlue™）（内境界膜染色）の米国上市
2020年4月	株式会社メドレックスと神経疼痛治療薬 DW-5LBTの共同開発契約締結
2020年8月	DW-5LBT（帯状疱疹後の神経疼痛）の米国承認申請
2020年9月	米国Glaukos Corporationと共同研究の対象疾患（角膜障害、網膜疾患）の追加並びに新たなライセンス契約締結
2021年10月	眼科手術補助剤DW-1002（製品名：TissueBlue™）（内境界膜染色）のカナダ上市
2021年11月	K-232（緑内障・高眼圧症）の国内製造販売承認申請
2022年3月	DW-1001の国内第Ⅰ相臨床試験開始
2022年6月	アクチュアライズ株式会社と水疱性角膜症を対象とした再生医療用細胞製品 DWR-2206の共同開発契約締結
2022年8月	K-321（フックス角膜内皮変性症）の米国第Ⅲ相臨床試験開始
2022年12月	グラアルファ®配合点眼液（開発コード：K-232）（緑内障・高眼圧症）の国内上市 H-1337（緑内障・高眼圧症）の米国後期第Ⅱ相臨床試験開始
2023年3月	フックス角膜内皮変性症治療剤 K-321 のグローバル第Ⅲ相臨床試験開始
2023年3月	米国で神経疼痛治療薬 DW-5LBT の承認申請再提出
2023年7月	眼科手術補助剤 DW-1002 とトリバンブルーの配合剤が米国でオーファンドラッグ指定 再生医療用細胞製品 DWR-2206 の開発計画決定
2023年8月	米国で緑内障治療剤 H-1337米国後期第Ⅱ相臨床試験における被験者への投与開始
2023年9月	米国FDAより神経疼痛治療薬 DW-5LBT の審査完了報告通知受領
2024年1月	米国でDW-5LBTの承認申請を再提出、FDAは2024年7月を審査終了目標と設定
2024年3月	再生医療用細胞製品 DWR-2206 の治験計画届提出、7月に国内での国内第Ⅱ相臨床試験開始
2024年10月	緑内障治療剤H-1337の米国後期第Ⅱ相臨床試験における被験者への投与完了、11月にトプラインデータ結果を報告
2024年12月	再生医療用細胞製品DWR-2206の国内第Ⅱ相臨床試験における被験者への投与完了
2025年2月	中国国家薬品监督管理局（NMPA）より眼科手術補助剤DW-1002承認取得
2025年3月	米国で神経疼痛治療薬DW-5LBT承認申請再提出
2025年9月	DW-5LBT（帯状疱疹後の神経疼痛）の米国承認取得
2026年3月	千寿製薬株式会社と資本業務提携を締結

出所：同社有価証券報告書、プレスリリースよりSIR作成



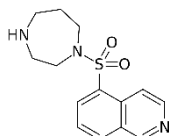
日高弘義氏
DWTIの創業者

キナーゼ阻害剤開発のパイオニア

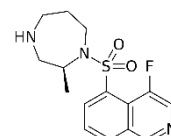
DWTIの創業者、日高弘義医師は医学部卒業後に医師として勤務していたが、熟考の後、新薬の発見の方がより多くの患者の健康に貢献できるのではないかと考えるにいたった。大学で教鞭をとる傍ら、薬理学の研究を続け、複数の製薬会社と薬の開発に携わり二つの製品化に成功した。そして「自分の技術で有効な薬を開発したい」という思いから、1999年2月、新薬の研究開発を目的としたバイオベンチャー企業、D. Western Therapeutics Instituteを設立した。

日高医師は、世界初のRhoキナーゼ阻害剤である塩酸ファスジル（HA-1077）の開発に携わった。1995年に日本と中国で承認され、くも膜下出血後の脳血管攣縮の治療に使用されている。また肺高血圧症の治療にも有効であることが確認されている。ファスジル誘導体リパスジル塩酸塩水和物（K-115）は、緑内障や高眼圧症の治療に用いられる。

Fasudil
hydrochloride
molecule
skeletal
formula



Ripasudil
hydrochloride
hydrate
molecule
skeletal
formula



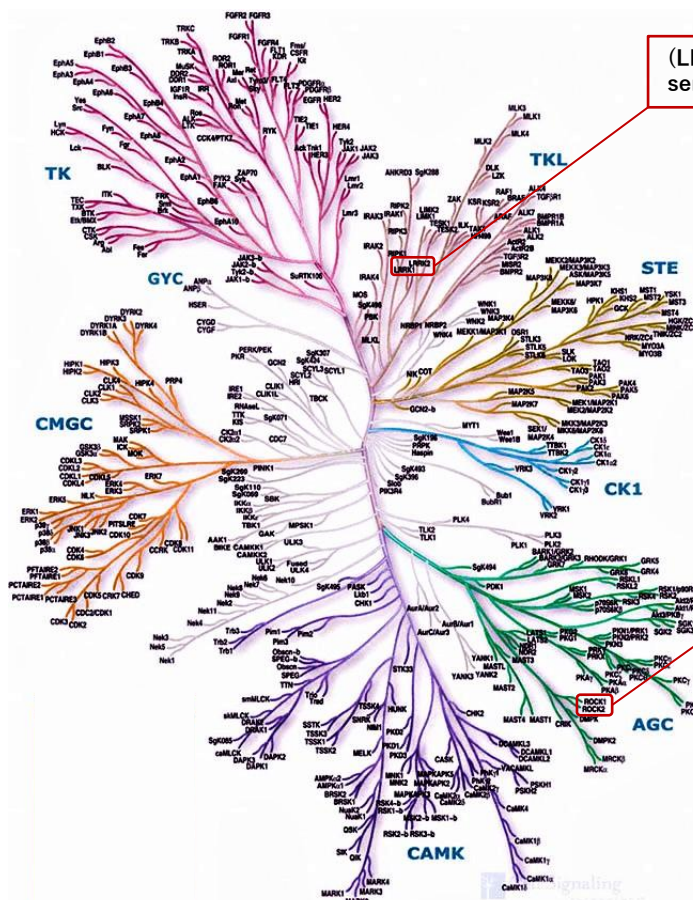
ヒトキノームと治療薬としてのキナーゼ阻害剤

キナーゼ阻害剤とは、1つ以上のプロテインキナーゼの作用を阻害する酵素阻害剤の一種である。プロテインキナーゼは、タンパク質にリン酸基（PO4）を付加してその機能を調節する酵素である。

リン酸化は多くの生物学的プロセスを制御しており、キナーゼ阻害剤は、プロテインキナーゼの活性亢進による疾患（癌における変異または過剰発現したキナーゼを含む）の治療や、他の疾患要因を克服する細胞機能の調節に使用される。

ヒトキノームには、ヒト遺伝子の1.7%を占める518のプロテインキナーゼ、478の真核生物プロテインキナーゼ（ePK）、およびePKドメインに配列上の類似性を持たない40の非定型プロテインキナーゼ（aPK）が含まれている。

ヒトプロテインキナーゼの概要（配列の類似性に基づいてグループに分類）



(LRRK2) Leucine-rich repeat serine/threonine-protein kinase

DWTIが米国および日本で開発中のH-1337は、緑内障および高眼圧症を適応症とするLRRK2を中心とするマルチキナーゼ阻害剤である

(ROCK) Rho-associated coiled-coil-containing protein kinase

DWTIのK-115 Ripasudil (GLANATEC® ophthalmic solution 0.4%)は、Rhoキナーゼ阻害剤である

出所： Cell Signaling Technology, Inc. (www.cellsignal.com)より転載

株主の状況

大株主の状況

2025年12月31日現在の大株主上位は下表のとおりだが、2026年3月25日に締結した千寿製薬株式会社との資本業務提携に基づき、4月10日に新株式2,150,500株を発行する。新株発行後の持ち株比率は3.77%（2026年3月31日現在の自己株式を除いた発行済株式総数に発行新株式数を加えた株数を分母とする）。

大株主の状況（2025年12月31日現在）

株主名	持株数（株）	持株比率（%）
1 日高 有一	5,150,600	9.49%
2 楽天証券株式会社共有口	2,311,900	4.26%
3 MSIP CLIENT SECURITIES (常任代理人：モルガン・スタンレーMUFG証券株式会社)	1,130,200	2.08%
4 株式会社SBI証券	885,918	1.63%
5 株式会社ミートプランニング	850,000	1.56%
6 日高 万由子	730,000	1.34%
7 SMBC日興証券株式会社	592,300	1.09%
8 日高 弘義	428,800	0.79%
9 日本証券金融株式会社	360,500	0.66%
10 モルガン・スタンレーMUFG証券株式会社	306,113	0.56%
★ Top 10 Total	12,746,331	23.49%

出所：同社有価証券報告書よりSIR作成

注：持株比率は発行済株式総数から自己株式（286株）を控除して算出。

2026年4月10日の第三者割当増資

割当先	発行新株式数（株）	持株比率（%）
千寿製薬株式会社	2,150,500	3.77%

出所：同社プレスリリースよりSIR作成

注：持株比率は増資後の発行済株式総数（自己株式を除く）を分母として算出。

創業者：日高 弘義 氏 M.D., Ph.D.

年月	略歴
1938年	誕生
1976年4月	京都大学医学部 助教授
1978年4月	三重大学医学部 教授
1987年8月	名古屋大学医学部 教授
1998年7月	米国デューク大学 客員教授
1999年2月	DWTI 設立 代表取締役
2004年11月	同社 取締役開発研究所長
2009年3月	同社開発研究所長
2009年11月	国立大学法人三重大学学長アドバイザー
2010年6月	同社最高科学責任者兼 開発研究所長
2011年3月	同社取締役最高科学責任者兼 開発研究所長
2012年6月	同社代表取締役会長兼 最高科学責任者
2015年12月	日本革新創薬(株) 取締役
2020年3月	同社取締役会長兼 最高科学責任者

代表取締役社長：日高 有一 氏

年月	略歴
1973年	誕生
1996年4月	(株)三和銀行(現(株)三菱UFJ銀行) 入行
2006年7月	DWTI 総務管理部長 同社取締役総務管理部長
2007年4月	同社常務取締役総務管理部長
2008年12月	同社代表取締役社長(現任)
2015年12月	日本革新創薬(株) 取締役
2022年7月	アクチュアライズ株式会社 社外取締役(現任)

出所：同社有価証券報告書よりSIR作成

上市品

上市品は4製品

上市品を有する上場創薬スタートアップは、数少ない。譲受等を除く自社発明品に限定すると、さらに少ない。DWTIはその少ないうちの1社である。

同社初の国内上市品は、2014年12月のグラナテック®点眼液0.4%（一般名：リパスジル塩酸塩水和物、対象疾患：緑内障・高眼圧症）である。その後3製品が上市した。現在、DWTIが保有している製品は4製品である。

上場している日本の創薬スタートアップがアセット創出または開発して承認された医薬品・再生医療等製品の主な例（後発品を除く）

- 日本の創薬スタートアップが創薬研究または開発を行って上市にいたった医薬品・再生医療等製品はまだ少ない。
- それらの中で、モダリティやアンメットメディカルニーズへの対応において革新的といえるものは限られている。

承認年	開発品	起源(シーズ創出)	承認取得企業	モダリティ	適応症	備考
2005	ヨウ素軟膏	メドレックス	メドレックス	低分子	褥瘡、皮膚潰瘍	2022年帝国製薬に承継
2007	自家培養表皮	米Harvard大	J-TEC*	再生医療	重症熱傷ほか	国内初の再生医療製品
2010	プリリアントブルー	九州大	蘭D.O.R.C.社	低分子	内境界膜剥離(眼科手術補助剤)	DWTIがヘリオスから事業譲受
2010	ベンダムスチン	アステラス独法人	シンバイオ製薬	低分子	非ホジキンリンパ腫ほか	欧州で承認済を導入
2012	自家培養軟骨	広島大	J-TEC*	再生医療	外傷性軟骨欠損症ほか	
2012	グリコピロニウム臭化物	英Vectura社	Novartis	低分子	COPD	そーせいが英Arakis社買収により獲得
2014	吸収性局所止血材	米MIT	3Dマトリックス	医療材料	止血材	
2014	リパスジル塩酸塩	デ・ウエスタン・セラピテクス研究所	興和	低分子	緑内障ほか	
2018	テゴブラザン	ラクオリア創薬	韓HK inno.N社	低分子	胃食道逆流症	韓国、中国で販売
2019	ペペルミノゲンペルプラズミド	大阪大 アンジェス	アンジェス	遺伝子治療	慢性動脈閉塞症潰瘍	国内初の遺伝子治療 世界初のHGF対象
2019	グラニセトロン	英Strakan社	ソレイジア	低分子	悪心・嘔吐	中国・東南アジアの権利
2020	ボロファラン	ステラファーマ	ステラファーマ	低分子	頭頸部がん	世界初のBNCT用薬剤
2020	自家培養角膜上皮	伊Modena大	J-TEC*	再生医療	角膜上皮幹細胞疲弊症	
2021	自家培養口腔粘膜上皮	大阪大	J-TEC*	再生医療	角膜上皮幹細胞疲弊症	
2022	ダリナパルシン	米Alaunos社	ソレイジア	低分子	末梢性T細胞リンパ腫	

*J-TEC: ジャパン・ティッシュエンジニアリング

出所: 厚生労働省 医薬品の迅速・安定供給実現に向けた総合対策に関する有識者検討会 第7回資料

DWTIの上市品

	製品名	一般名等	対象疾患	地域	ライセンスアウト先
緑内障治療剤	グラナテック®点眼液0.4% 注	リパスジル塩酸塩水和物	緑内障・高眼圧症	日本・アジア	興和
	グラアルファ®配合点眼液	リパスジル塩酸塩水和物とプリモニジン酒石酸塩の配合剤			
眼科手術補助剤 注	ILM-Blue®、TissueBlue™	プリリアントブルーG (BBG)	内境界膜染色	欧州・米国等	DORC 注
	MembraneBlue-Dual®	BBGとトリパンプブルーの配合剤	内境界膜、網膜上膜および増殖硝子体網膜症における増殖膜染色	欧州等	

注1: グラナテック®は、上市国のロイヤリティは終了している。眼科手術補助剤は、特許満了国のロイヤリティは終了している。

注2: Dutch Ophthalmic Research Center International B.V.

出所: 有価証券報告書、決算短信よりSIR作成

ビジネスモデル

DWTIの事業領域と収益構造

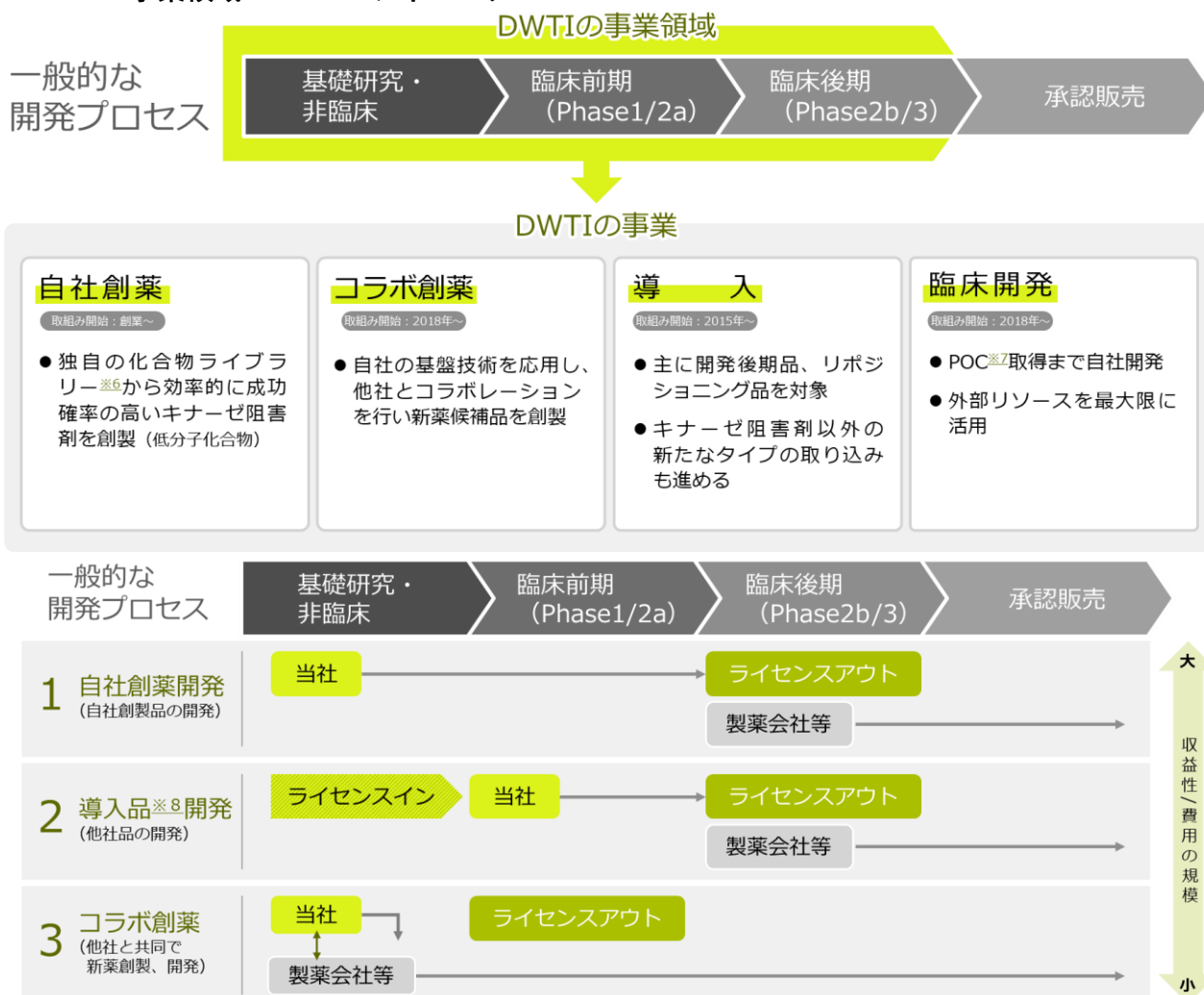
DWTIはバイオベンチャーとして創業して以来、創薬・開発事業の上流である創薬に経営資源を集中し、新薬候補化合物を早期にライセンスアウトしてきた。このビジネスの収益源は、①導出契約締結時の契約一時金（フロントマネー収入）、②臨床試験の進捗に応じて所定のマイルストーン達成で受け取るマイルストーン収入③発売後の売上に対して一定の割合（マージン）で受け取るロイヤリティ収入である。収入のない初期段階では研究開発費がかさむため、このビジネスモデルでは、DWTIの強みである研究開発技術に経営資源を集中し、開発パイプラインを継続的に拡大するための地道な努力を続けることを可能とする。

DWTIの収益構造

区分	内容
フロントマネー収入	アライアンス締結（ライセンスアウト等）時に受領する収入
マイルストーン収入	臨床開発進行に伴い、その節目ごとに受領する収入
ロイヤリティ収入	製品上市後販売額の一定比率を受領する収入
その他収益	共同研究費等、パートナー先から受領するその他の収入

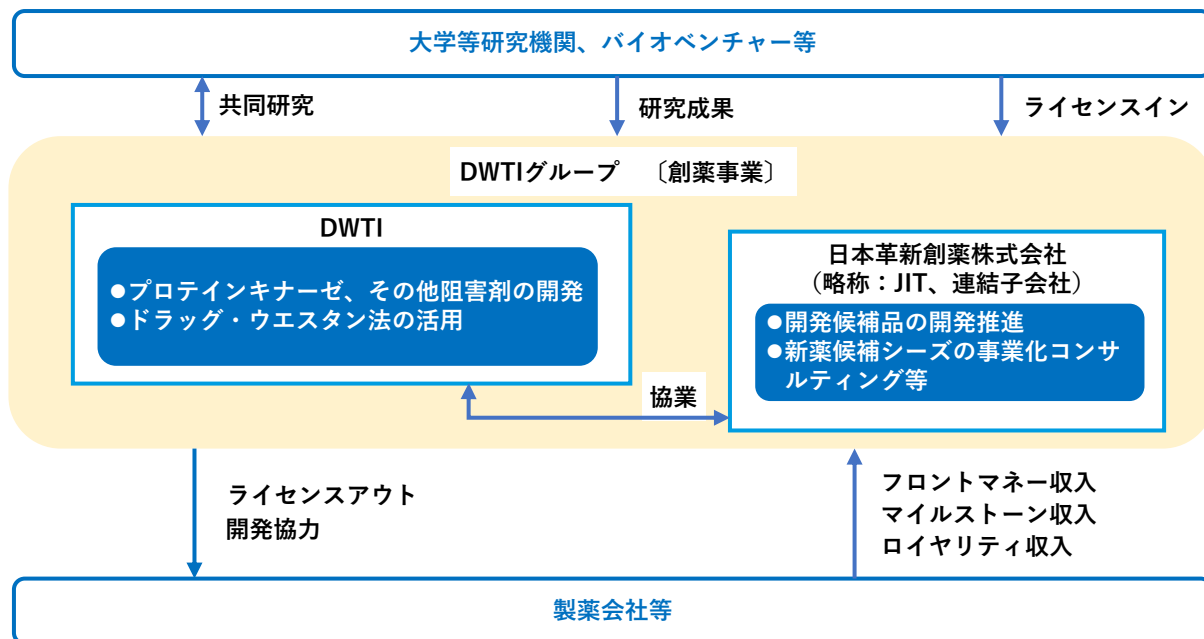
出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」よりSIR作成

DWTIの事業領域・3つのビジネスモデル



出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

事業の系統図



出所：同社有価証券報告書よりSIR作成

研究開発の特徴

プロテインキナーゼ阻害剤を中心とした新薬候補化合物の創製

DWTIグループは主にプロテインキナーゼを中心とした阻害剤の研究開発を進めている。プロテインキナーゼは、細胞の分化、増殖等の細胞内情報伝達機能を担っている重要な酵素であるとされている。そのプロテインキナーゼに対し、有望な新薬候補品である阻害剤を投与することによって治療効果を高めるのがDWTIグループの開発の特徴となっている。

DWTIは、有望な新薬候補品を創製するために、独自に開発した化合物ライブラリーを保有しており、これらの開発過程で蓄積したデータやノウハウを活用して、新薬候補化合物を合成している。これらの技術力が高いことから、有効な新薬候補化合物が見つかる可能性が高いと考えている。

新薬候補品の創出に向けた研究活動

眼科領域	キナーゼ阻害剤
<p>■ 眼科疾患の知見を活かし、前眼部・後眼部の全てを対象に研究実施</p>	<p>■ 強みであるキナーゼ阻害剤の創製と開発ノウハウを活かし、各疾患のメカニズムに注目して研究実施</p>

出所：同社決算説明資料よりSIR作成

3つの創薬エンジン

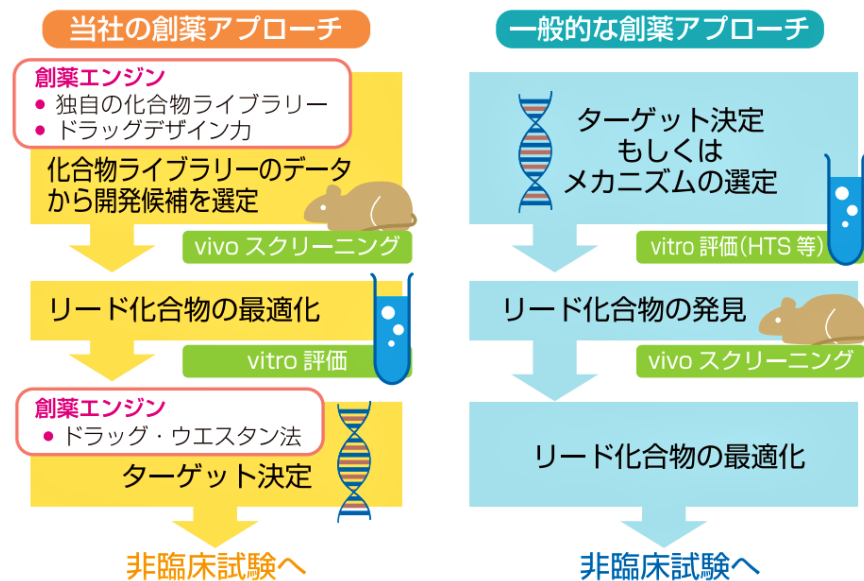
- 広範囲化合物ライブラリー
- ドラッグデザイン力
- ドラッグ・ウエスタン法

3つの創薬エンジン

DWTIの基礎研究と新薬候補化合物の作用機序（MOA）の解明の基本的なステップは以下のとおりである。①独自の創薬エンジンを用いて、シード化合物から新規物質を合成し、スクリーニングを繰り返して対象疾患に効果があることを実証し、有益な新薬候補化合物を創出すること、②創薬エンジンを用いて、新薬候補化合物の結合タンパク質を探索し、その作用機序を解明すること、③新薬候補化合物の特許を取得すること。

DWTIはプロテインキナーゼ阻害剤に関する技術的な専門性を有しており、同社の創薬アプローチは3つの創薬エンジンに基づく。①数十年にわたって蓄積されたプロテインキナーゼ阻害剤のシード化合物の豊富なライブラリー、②創業者が大手製薬会社の医薬品開発プロジェクトに参画し、細胞内シグナル伝達研究に基づいて蓄積された豊富な分子薬理学的データと解析に基づくドラッグデザイン力、③投与された薬剤が体内のどのタンパク質に結合するかを調べるドラッグ・ウエスタン法（目標設定）。これらの3つの技術を組み合わせて効率的にキナーゼ阻害剤を創製する。

DWTIの創薬アプローチ



出所：同社ウェブサイト

化合物ライブラリー

DWTIの化合物ライブラリーは、長年の研究活動で蓄積された多種類のプロテインキナーゼ阻害剤を多く取り揃えている。このライブラリーにある化合物のうち、薬効、安全性、物性等に優れた化合物は、シード化合物と呼ばれており、ここから新薬候補化合物が創製される。

一方、優れた阻害作用を持ちながらも、結果的に医薬品として開発されなかった化合物も複数含まれており、代表的なものは基礎研究用試薬として販売され、現在も世界中の研究ラボで使用されている。

DWTIのライブラリー化合物からは、これまでに医薬承認されたプロテインキナーゼ阻害剤を含むことから、他社からも注目を集めており、共同創薬活動を通して、従来にはない新規のキナーゼ阻害剤の創製に取り組んでいる。

主要な化合物ライブラリー

販売している 研究用試薬			販売されて いる医薬品	開発中の 新薬候補
W-7 CaM inhibitor 1977	H-7 PKC inhibitor 1985	H-8 PKG inhibitor 1985	Eril® : Fasudil Rho-kinase inhibitor 1995年上市	H-1337 Multi-kinase inhibitor
ML-9 ML-7 MLCK inhibitor 1987	CKI-7 Casein kinase inhibitor 1989	H-89 PKA inhibitor 1990	Glanatec® : Ripasudil Rho-Kinase inhibitor 2014年上市	
KN-62 CaM kinase II inhibitor 1990	KN-93 CaM kinase II inhibitor 1990	H-1152P Rho-kinase inhibitor 2002	Pletaal® : Cilostazol PDE3 inhibitor 1988年上市	
Cilostamide PDE3 inhibitor 1979				

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

ドラッグ・デザイン力

細胞内情報伝達経路の研究に由来する、充実した分子薬理学的データおよび解析能力は、探索研究段階において新薬をデザインする能力、すなわちドラッグ・デザイン力への大きな強みとなっている。

この高いドラッグ・デザイン力によって、何万分の一と呼ばれている新薬開発の中で、高い確率で新薬候補化合物を創り出している。

ドラッグ・ウエスタン法

ドラッグ・ウエスタン法とは、投与された薬が身体内のどの様なタンパク質に結合しているのかを調べる方法である。DWTIがバイオテクノロジーを応用して発明し、特許を有していた。一般に薬がどのタンパク質に結合したかを調べるには、煩雑で大量のタンパク質精製が必要だが、このドラッグ・ウエスタン法は、少量のタンパク質で標的タンパク質を同定することが可能となる。

一定の条件下で薬に結合するタンパク質の遺伝子を単離し、遺伝子配列を解析することにより、薬がどのタンパク質に結合したかを特定する。そのタンパク質の機能を調べることによって開発する新薬の可能性を明らかにすることができる。

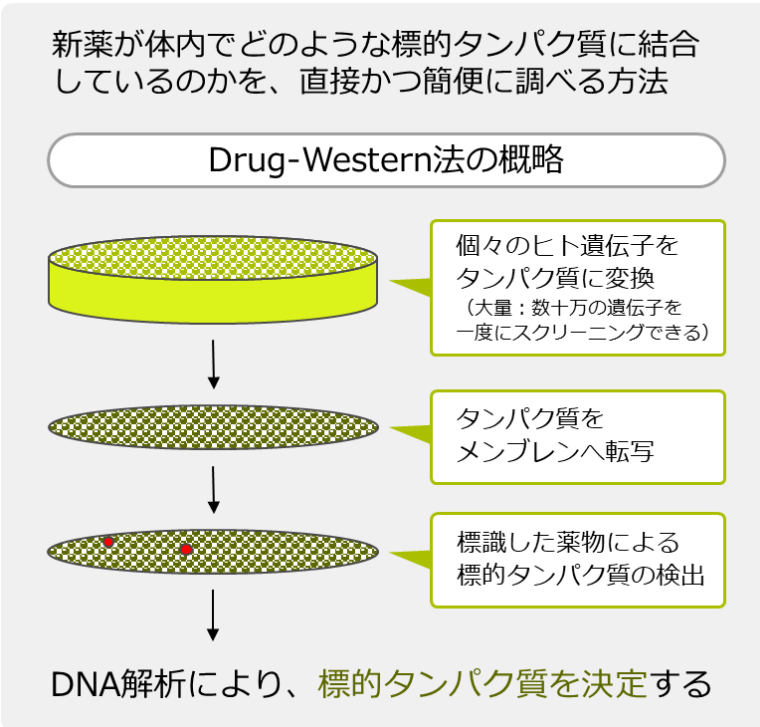
また、薬の開発の初期の段階で、新薬の分子標的を特定することは、その薬の有効性や安全性を明らかにするだけでなく、臨床試験などのその後の新薬開発の効率性にも大きな影響を与える。

※ DWTIの社名「デ・ウエスタン・セラピテクス研究所」は、「ドラッグ・ウエスタン法」から名付けられている。

Drug-Western法

- 新薬候補化合物の標的タンパク質を決定する
- タンパク質の機能を調べることは、安全性と有効性を明らかにするのに役立つ
- また、その後の開発の効率を高める

ドラッグ・ウエスタン法の概略図



出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

研究開発体制

DWTIグループの研究開発体制

DWTIの研究開発は、同社が三重大学に設置している産学官連携講座「臨床創薬研究学講座」で行われている。三重大学医学部内に設置された研究所では、大学内の知識や設備を活用し、効率的な研究開発を行っている。

DWTIグループの研究開発体制は、研究本部（生物科学、合成化学および開発企画管理の各グループによって構成）において新薬候補化合物探索活動等を行うほか、事業開発部および開発本部が連結子会社である日本革新創薬株式会社（JIT）と協力して製薬会社等との情報交換およびライセンスアウトに関する業務、事業開発および臨床開発に関する業務を行っている。

DWTIグループと外部機関との関係図

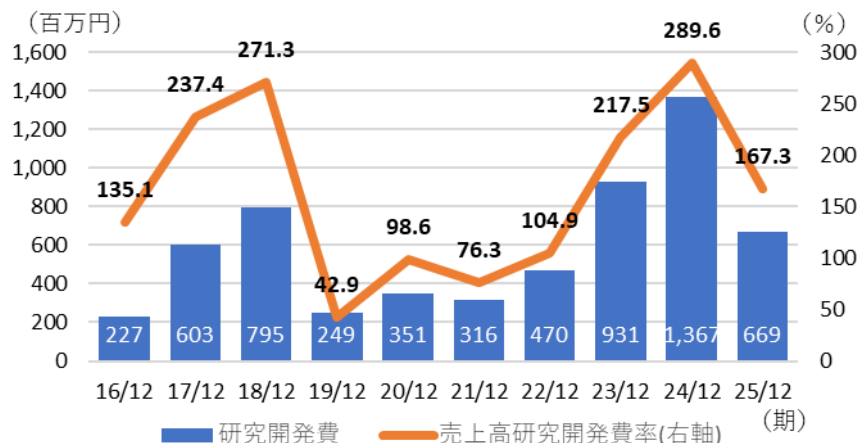


出所：同社有価証券報告書

研究開発費

2025/12期の研究開発費は669百万円、前期比51.0%減となった。2024/12期はH-1337、DWR-2206の臨床試験を実施したことにより、研究開発費が大幅に増加していた。2025/12期の研究開発費は、主に創薬研究活動、H-1337の第III相臨床試験準備費用である。

研究開発費の推移



出所：同社有価証券報告書よりSIR作成

注：SIRでの財務データ処理は短信規定と異なるため記載数字は会社資料と相違することがある。

大学、外部機関等との共同研究

三重大学とは、2006年12月に教育研究活動の活性化、DWTIの研究開発業務の支援を目的として共同研究契約を締結している。産学官連携講座を設置するなど、三重大学内に研究基盤をおいている。この契約以外でも、同社はさまざまな大学との共同研究を行っている。2024/12期以降の新規の共同研究開発実績（開示分）は下表のとおりである。

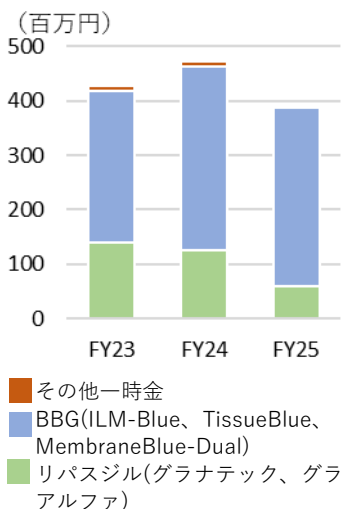
新規の共同研究実績（開示分）

区分		研究内容	対象
2024/12期	東京大学	緑内障手術に関わる画期的な新規点眼剤の開発	他社品 眼科
	名古屋市立大学	DWTIの化合物を用いたED治療薬の開発検討	自社品 眼科以外
	第一工業製薬(株)	ドライアイ治療薬の創製を目指した探索研究	他社品 眼科
	東京都医学総合研究所	眼疾患を対象にした遺伝子治療薬の共同研究	他社品 眼科
	北里大学	DWTIの化合物を用いたがん領域の治療薬の共同研究	自社品 眼科以外
2025/12期	九州大学	眼疾患を対象にした治療薬の共同研究	自社品 眼科
	名古屋大学	DWTIの化合物を用いた統合失調症治療薬の共同研究	自社品 眼科以外
	東北大学	新たな眼疾患治療薬創出に向けた次世代製剤開発	他社品 眼科
	三重大学	DWTIの化合物を用いた生活習慣病の共同研究	自社品 眼科以外
	福井大学	白内障治療薬創出に向けた共同研究	他社品 眼科
	Chordia Therapeutics(株)	眼疾患を対象にした治療薬の共同研究	他社品 眼科
2026/12期	(株)LABバイオテック	乳酸菌エクソソームを用いた眼疾治療薬の共同研究	他社品 眼科

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、同社プレスリリースよりSIR作成

2025/12期通期業績

売上高・ロイヤリティ収入



出所：同社決算説明資料

業績概要

● 売上高／ロイヤリティ収入

上市品（眼科手術補助剤BBG、緑内障治療剤グラアルファ®配合点眼液については、ライセンスアウト先において順調に販売され、ロイヤリティ収入は好調。グラアルファ®は海外展開として、7月にタイ、12月にマレーシアで販売開始された。一方、グラナテック®の国内ロイヤリティが2024年9月に終了したことが影響し、売上高は前期比17.8%減の387百万円となった。

なお、BBGについては2025年12月に米国以外の特許が満了したことから、該国のロイヤリティは終了した。グラナテック®点眼液0.4%（海外）についてもロイヤリティは2025年で終了した。

● 販管費／研究開発費

研究開発費は669百万円（同51.0%減）を計上。主な内訳は、①創薬研究開発活動、H-1337の第Ⅲ相臨床試験準備費用等、②DW-5LBT承認取得によるマイルストーン支払、である。なお、2025/12期の減少要因は、2024/12期においてH-1337、DWR-2206の臨床試験実施の費用発生への反動減によるものである。研究開発費を含めた販管費全体では968百万円（同40.7%減）となった。

● 損失

上記の結果、営業損失は619百万円（2024/12期1,209百万円の損失）、経常損失は630百万円（同1,228百万円）、当期純損失632百万円（同1,290百万円）となった。

連結決算概要・推移

百万円, %	FY21.12	FY22.12	FY23.12	FY24.12	FY25.12	FY26.12
[J-GAAP]	実績	実績	実績	実績	実績	期初予想
売上高	414	448	428	471	387	300
YoY	16.5	8.1	-4.4	10.1	-17.8	-22.6
<i>地域別</i>						
・日本	175	227	151	136	60	
・オランダ	170	221	278	335	327	
<i>主要な顧客別 (売上高の10%以上)</i>						
・興和株式会社	172	171	140	126	60	
・Dutch Ophthalmic Research	170	221	278	335	327	
売上原価	20	28	37	47	39	
売上総利益	394	421	392	425	349	
販売管理費	566	726	1,190	1,634	969	
・研究開発費	316	470	931	1,368	669	
対売上高比率	76.3%	104.9%	217.5%	290.4%	172.9%	
・その他販管費	250	257	260	267	298	
営業損益	-172	-306	-799	-1,210	-619	-780
経常損益	-160	-296	-796	-1,228	-630	-800
親会社株主に帰属する当期純損益	-149	-430	-812	-1,290	-632	-800
主要B/S指標						
・現預金	1,934	2,335	1,867	1,126	1,710	
資産合計	2,463	2,956	2,373	1,669	2,169	
負債合計	428	1,083	1,094	936	734	
純資産合計	2,035	1,873	1,280	734	1,435	
自己資本比率	81.4%	62.8%	53.9%	43.9%	66.1%	

出所：有価証券報告書、決算短信よりSIR作成

注：SIRでの財務データ処理は短信規定と異なるため記載数字は会社資料と相違することがある。

2025/12期初に見込んでいたイベントの達成状況

2025/12期初に見込んでいたイベントおよび達成状況は下表のとおり。このうち、DW-1002の日本での申請は2026/12期を計画している。DW-1002（中国）については、すでに特許切れのため、今後、中国で上市となってもライセンス収入は得られない。

2025/12期のイベント達成状況

開発品	提携先	地域	イベント	達成時期
H-1337	—		P3準備及びライセンス活動	P3準備進行中、導出未達
H-1129	—		計画外；新規パイプライン化	2025/7
DW-5LBT	(共同開発) 		再申請	2025/3
			→承認取得	2025/9
DWR-2206	(共同開発) 		観察期間終了	2025/11
			臨床試験開始	—
K-321	リパスジル 塩酸塩水和物 		2つ (①②) のグローバルP3試験の完了	①2025/11 ②—
DW-1002	プリリアントブ ルーG (BBG) 		承認取得 →上市	2025/2
		 	申請	—

出所：同社決算説明資料

2025/12期 開発パイプラインの現況

2025年7月、同社は新規パイプラインとしてH-1129の開発を決定した。H-1129は2012年に緑内障治療剤として開発を開始したが、2019年に第III相臨床試験で開発中止となった。再開にあたっては、アセット有効活用の観点から、他疾患への適用を検討し、免疫異常を基盤とする角結膜疾患治療薬での開発となった。

2025/12期の開発パイプラインの進捗状況

開発品名	対象疾患	地域	P1	P2	P3	申請	承認	上市	パートナー
H-1337	緑内障								—
H-1129	免疫異常を基盤とする角結膜疾患治療薬			P2開始でPMDAに相談予定					—
DW-5LBT	帯状疱疹後の神経疼痛								(共同開発)
DWR-2206	水疱性角膜炎				中国は臨床試験開始を計画				(共同開発)
K-321	フックス角膜内皮変性症								
DW-1002	眼科手術補助剤 (染色)								DORC
DW-1001	非開示								NEVER SAY NEVER ロート製薬

・・・眼科疾患のパイプライン

出所：同社決算説明資料

2026/12期通期 業績予想

2026/12期の連結業績予想

2026/12期の連結業績予想は300百万円(同22.6%減)、営業損失780百万円、経常損失800百万円、当期純損失800百万円である。売上高は主に、眼科手術補助剤ブリリアントブルーG (BBG)、緑内障治療剤グラアルファ®のロイヤリティ収入である。BBGについては、2025年12月に米国以外の海外特許満了に伴いロイヤリティ収入の減少を見込んでいる(国内については独占的ノウハウライセンス条項付製品供給契約により影響はない)。また、グラナテック®の海外ロイヤリティも2025年に終了した。研究開発費については前期比111百万円増の780百万円を見込んでいる。

2026/12期通期 業績予想

(百万円)	2025/12期 実績	2026/12期 予想	前期比 増減額	主な要因
売上高	387	300	-87	<ul style="list-style-type: none"> DW-1002 (欧州) のロイヤリティ受領期間満了により減収見通し 主なロイヤリティ収入は、DW-1002、グラアルファ® DW-1002 (日本) のマイルストーン収入を見込む DW-5LBTは合理的な算定が困難なため、計上せず
営業損失	-619	-780	-161	<ul style="list-style-type: none"> 研究開発費は増加を見込む ※下段参照 その他販管費は、概ね前期並み
経常損失	-630	-800	-170	
当期純損失	-632	-800	-168	
研究開発費	669	780	111	主な内訳 <ul style="list-style-type: none"> H-1337、H-1129の臨床試験に向けた開発費用 (毒性試験、治験薬製造 etc) 新薬創出に向けた研究費用 (自社創薬・共同研究) は前期比増加

出所：同社決算説明資料よりSIR作成

2026/12期に発生が見込まれるイベント

開発品	提携先	地域	イベント
DW-5LBT	(共同開発) 		販売パートナー決定、上市
DWR-2206	(共同開発) 		臨床試験開始
K-321		 	グローバルP3試験 (2つ目) の観察期間完了
DW-1002			申請
			申請

出所：同社決算説明資料

トピックス①

第13回新株予約権の概要

行使期間	2025年8月1日～ 2027年8月2日
潜在株式数	10,000千株 2026年3月末時点 909.8千株
調達資金 (当初)	1,339.2百万円 (行使価額134円)
その他	行使価額修正条項付

出所：同社プレスリリース

新規パイプラインとして「H-1129」の開発決定（2025年7月15日発表）

DWTIは2025年7月15日、自社創製品であるH-1129を新たなパイプラインとして設定し、免疫異常を基盤とする角結膜疾患治療薬として開発を行うことを決定したと発表した。「角結膜疾患」とは、角膜・結膜に炎症、障害を起こす病態の総称である。角膜は、虹彩、瞳孔、および前房を覆うドーム状の透明な層で、光を屈折させて網膜に焦点を合わせる役割を果たす。結膜は、まぶたの内側を覆い、眼球の白目部分（強膜）を覆う薄い粘膜で、目を潤滑に保ち、ウイルス性や細菌性の感染症を引き起こす可能性のある刺激物質の侵入を防ぐ役割を果たす。

H-1129は、DWTIの創薬エンジンを用いて創出された自社創製のRhoキナーゼ阻害剤である。緑内障治療剤として2019年まで開発を行っていたが、国内第Ⅲ相臨床試験にて開発中止となった。その後、知的財産の有効活用およびキナーゼ阻害剤のポテンシャル発揮の観点から、他疾患への適用を検討していた。こうした経緯から、H-1129については、国からの研究開発費の助成や優先的な承認審査などの優遇措置が期待できるオーファン指定申請を検討している。また、第Ⅰ相臨床試験がすでに完了しているため、第Ⅱ相臨床試験から開発を検討（新薬承認の規制当局である独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）と要相談）するなど、早期承認を目指している。

H-1129開発決定に伴い、新株予約権（第13回）の発行が公表された（発行日は2025年7月31日、割当先は株式会社SBI証券）。新株予約権の発行による調達予定資金1,339百万円のうち、650百万円がH-1129を含む新規開発品の開発費用に充当される。なお、今回の新株予約権による潜在株式数は10,000千株のうち、2026年3月末現在で9,090.2千株が行使された。

H-1129の開発経緯

- 2012年 緑内障治療剤として開発開始
- 2019年 国内第Ⅲ相臨床試験で開発中止
 - ⇒ リポジショニングを検討
 - 病態モデル（動物）において、顕著な有効性あり
 - ⇒ 免疫異常を基盤とする角結膜疾患治療薬の開発を決定
(対象疾患は、競合戦略上非開示)

出所：同社決算説明資料よりSIR作成

H-1129の開発戦略

- ◆ オーファン指定申請を検討
 - ・ 国からの研究開発費の助成や優先的な承認審査などの優遇措置が期待できる
- ◆ 2019年 国内第Ⅲ相臨床試験で開発中止
 - ・ 治験が小規模
 - － 過去の開発品と同様の製剤（点眼剤）を検討
 - － 第Ⅰ相臨床試験は実施済み、第Ⅱ相臨床試験から開発検討（PMDAと要相談）
 - ⇒ 2025年度下期から治験準備開始、2026年の第Ⅱ相臨床試験開始を目指す

出所：同社「H-1129の開発決定及び資金調達に関する補足資料」よりSIR作成

トピックス②

第三者割当の概要

払込期日	2026年4月10日
発行新株式数	2,150.5千株 (希薄化率3.96%※)
調達資金	199.9百万円 (1株当たり93円)

※希薄化率は2025年12月末現在の議決権個数で算出
出所：同社プレスリリース

千寿製薬株式会社との資本業務提携を締結（2026年3月25日発表）

DWTIは2026年3月25日、眼科領域に強みを持つ千寿製薬株式会社との資本業務提携を発表した。今回の資本業務提携に伴い、同社は千寿製薬向けに第三者割当増資を実施（実施日：4月10日）、199.9百万円の資金調達を行う。調達資金の用途は、同社が開発を進めている緑内障治療剤H-1337の日本での開発推進（日本における非臨床追加試験のための準備資金）である。

今回の資本業務提携により、対象となる市場に、米国に加え日本が追加された。対象となる患者数は日本では推定400万人で米国の同420万人とほぼ同水準。市場規模は米国の約30億ドルに日本の約885億円が加わったことで、H-1337の上市への期待がさらに高まる。

オプション契約の概要

対象疾患	緑内障を含む全ての眼科疾患
テリトリー	日本、中国（香港、マカオ、台湾を含む）、韓国、ASEAN加盟国およびその他一部地域
権利	「H-1337」のライセンス契約に移行する権利
先買権	DWTIは、千寿製薬に対し、テリトリー以外の国・地域において先買権を与える
役割	DWTI：「H-1337」の日本における第Ⅲ相臨床試験の実施 千寿製薬：DWTIの臨床試験の支援

出所：同社プレスリリース

今回の資本業務提携による「H-1337」の開発への取り組み・効果

	提携前	提携後
開発段階	■米国：第Ⅲ相臨床試験の準備中	■米国：第Ⅲ相臨床試験の準備中 ■日本：第Ⅲ相臨床試験の準備中
対象となる患者数（推定）	■米国：420万人	■米国：420万人 ■日本：400万人
対象となる市場規模（推定）	■米国：約30億ドル	■米国：約30億ドル ■日本：約885億円

出所：同社プレスリリースよりSIR作成

H-1337の開発について

2024年8月 米国後期第Ⅱ相臨床試験が終了

- ・試験結果は良好で、本開発品の有効性を確認
- ・安全性に関して重篤な有害事象は認められず

⇒日本においても第Ⅲ相臨床試験から開始することを計画

- ・米国で実施してきた臨床試験データおよび第Ⅲ相臨床試験のために準備しているデータの活用可能性を確認（PMDA[独立行政法人 医薬品医療機器総合機構]と要相談）
- ・日本の規制要件に適合する各種試験および治験実施体制の構築等を進める

出所：同社有価証券報告書、プレスリリースよりSIR作成

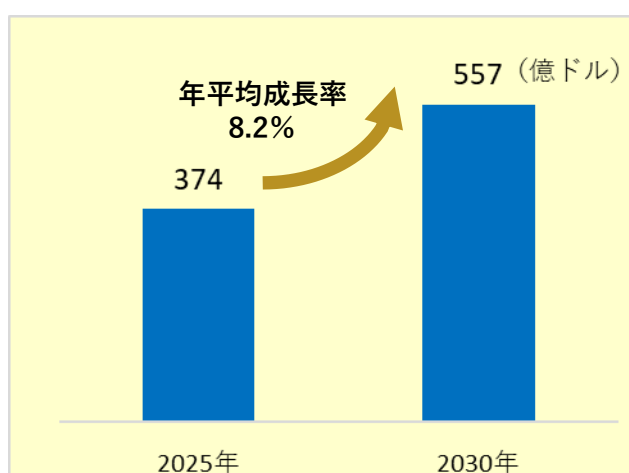
眼科用医薬品市場 (注力領域)

眼科領域に注力したパイプライン

DWTIの事業の特徴の一つとして「眼科領域に注力したパイプライン」がある。眼の健康に対する取り組みは、持続可能な社会の実現においてもきわめて重要な社会課題である。背景には、高齢化に加えて、デジタル化の進展等の生活環境の変化により、眼疾患の患者数の増加が予想されていることにある。

WHO（世界保健機関）によると、「失明または視覚障害の状態で暮らしている人は、全世界で約22億人と推定されている。そのうち、「予防ができたはずの疾患、または治療が必要な視覚障害を抱えたまま生活している人は約10億人と推定されている。

世界の眼科用医薬品市場



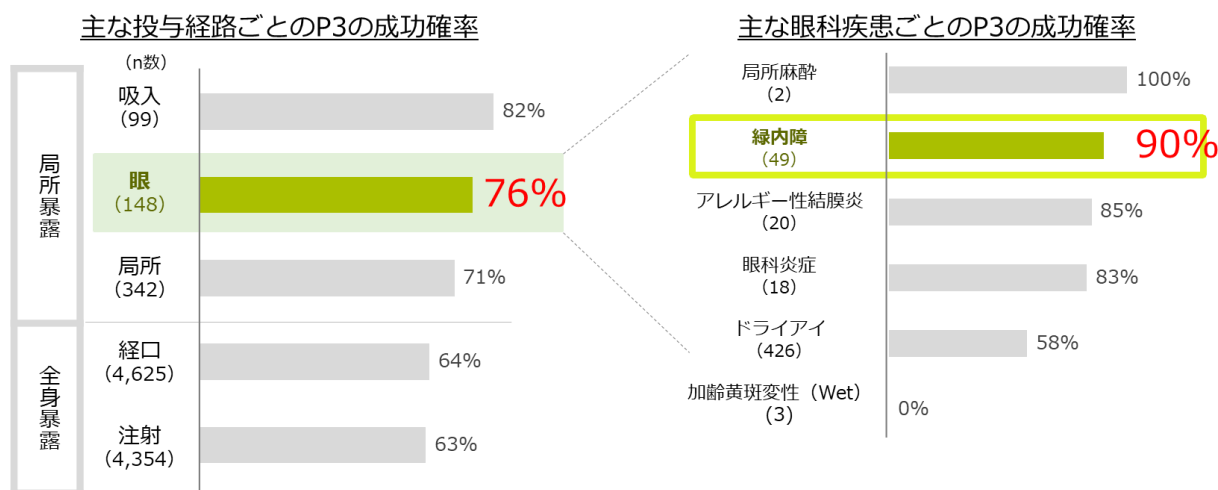
医薬品全体の年平均成長率
(2025-2030年予測)
6~7%を上回る成長率
※DWTI調べ

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」
原典：株式会社グローバルインフォメーション「眼科市場調査レポート」

眼科領域の第III相臨床試験の成功確率は高い

局所暴露は全身暴露よりも第III相臨床試験の成功率が高く、眼で76%。眼を投与経路とする眼科疾患のなかでも、緑内障は成功率が高い。

眼科領域における第III相臨床試験の成功確率



出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」
原典：Evaluate Pharma (2023/12/20時点) よりアーサー・ディー・リトル/グロース・キャピタル作成。対象製品はNME (Patented Compound) 」

緑内障の市場

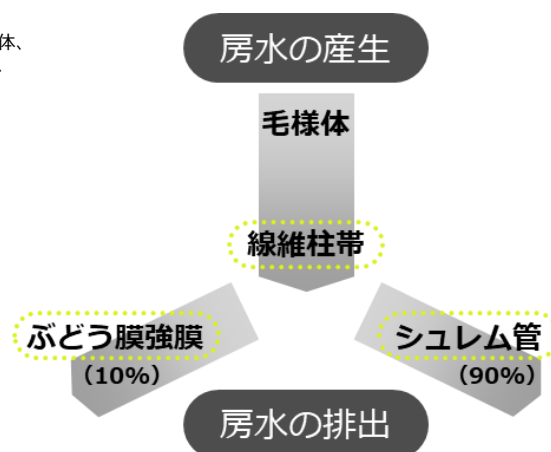
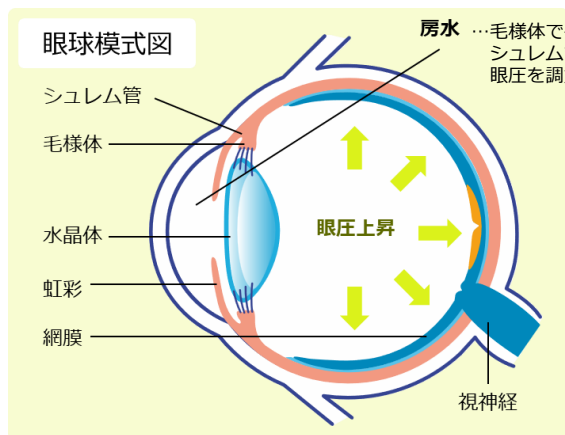
世界の緑内障患者は年率3%で増加予測

緑内障は“silent thief of sight”とも呼ばれ、自覚症状なく、眼圧上昇によって視野が狭くなる病気である。房水の循環不良→眼圧上昇→視神経圧迫という流れで、やがて視野欠損・失明を引き起こす。このため、治療には眼圧を下げるための点眼剤を投与する。

点眼剤は種類により作用点異なる。既存の点眼剤は、房水の産出を抑制、もしくはぶどう膜強膜の排出を促進させる。「第一選択薬」としてもっとも頻繁に用いられる強力な眼圧下降目薬はPG（プロスタグランジン）関連薬で、房水の排出を促進させる効果がある。DWTIの発明品グラナテック®、H-1337は、シュレム管からの排出を促進させる。

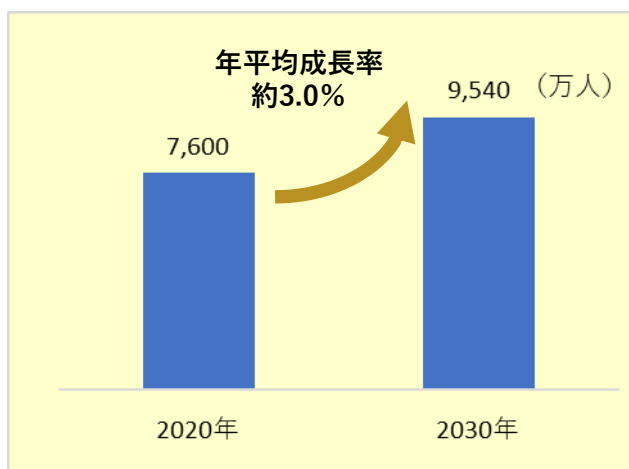
40歳以上の場合、20人に1人が発症するとされる。世界の緑内障患者数は2020年の7,600万人から2030年には9,540万人（年率約3.0%）に増加すると予測されている。

眼圧を下げるメカニズム



出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

世界の緑内障患者予測



出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」
 原典：World report on vision

角膜内皮障害の市場

有効な治療薬がなく、DWTIも開発を推進

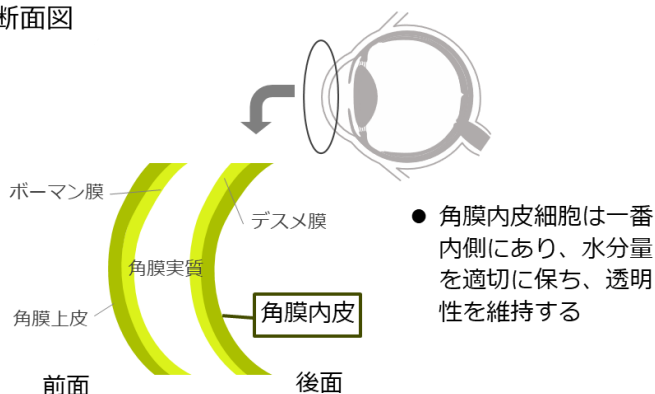
「角膜内皮障害」とは、角膜内皮細胞が障害を受け、視力が低下する病気である。フックス角膜内皮ジストロフィ、白内障手術、外傷、緑内障、角膜内皮炎などのさまざまな病因によって引き起こされる。

水疱性角膜症、フックス角膜内皮変性症などがあり、いずれも有効な治療薬はなく、重症化すると角膜移植が必要となる。しかしながら、角膜移植が必要となる患者のうち、70人に1人しか手術を受けられないのが現状である。それだけに、有効な治療薬の開発が望まれている。DWTIでは、DWR-2206、K-321の2つの開発パイプラインを有している。

欧米で患者数が多く、欧州で約16百万人、米国で6百万人と推定されている。

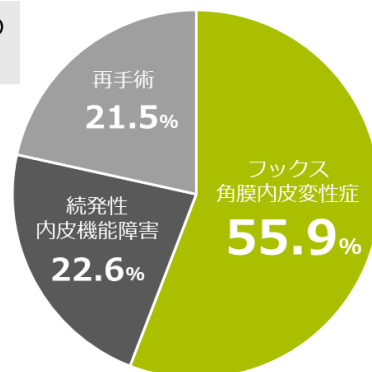
角膜断面図と、角膜移植の原因疾患

角膜断面図



- 有効な治療薬はなく、重症化すると角膜移植が必要

角膜内皮移植の原因疾患



出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

出典：2024 EYE BANKING STATISTICAL REPORT

角膜内皮障害の市場規模 推定患者数



※1 United Nations 「World Population Prospects 2024」より40歳以上の人口を当社計算し、罹患率4%（※2）を掛けた数値。

※2 Moshirfar M et al. Fuchs Endothelial Dystrophy. Treasure Island (FL):StatPearls Publishing;2021.

※3 当社調べ（関係者等へのヒアリングによる）

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

開発パイプラインの進捗計画

毎年1製品の上市を目指す

2026年はDW-5LBT（Bondlido）の上市を目指している。昨年9月に米国承認を取得し、現在、販売パートナーとの提携交渉中である。

2027年はDW-1002（BBG）の上市を計画している。2026/12期にはDW-1002の日本（単剤）、米国（配合剤）での承認申請が予定されており、現在申請に向け準備中である。

2028年はK-321（リパスジル適応拡大）の上市を計画している。2023年に米国を含めたグローバル第Ⅲ相臨床試験が開始されている。試験終了後、フックス角膜内皮変性症患者を対象に、まずは米国での上市を目指す。その後欧州展開を検討。ライセンスアウト先の興和株式会社で開発を推進し、同社の対応および資金負担はない。

開発パイプラインの進捗計画（下表以外のパイプラインとして「DW-1001」がある）

パイプラインの名称等		地域	2025	2026	2027	2028
H-1337	緑内障治療剤			※開発計画は確定次第、公表いたします。		
H-1129	免疫異常を基盤とする角結膜疾患				臨床試験	
DW-5LBT	帯状疱疹後の神経疼痛		再申請 承認	上市		
DWR-2206	水疱性角膜症		P2		P3	
				臨床試験		
K-321	フックス角膜内皮変性症	 		P3	申請	承認 上市
DW-1002	内境界膜染色 水晶体前嚢染色			申請	承認	上市
	内境界膜及び網膜上膜染色			申請	承認	上市

※上記計画は、ライセンスアウト先が想定する開発計画もしくは当社予想に基づく開発計画であり、実際の開発進捗と相違する可能性がある。

※DW-1001（眼科用治療剤）は、ライセンスアウト先のロート製薬の方針により、今後の開発計画を検討中のため不記載。

※H-1337の米国は、P2b試験まで終了し良好な結果を得ているが、日本の開発を優先。

出所：決算説明資料よりSIR作成

各開発パイプラインの概要

① H-1337 (対象疾患：緑内障・高眼圧症)

本開発品は、プロテインキナーゼ阻害剤を中心とする当社化合物ライブラリーのシード化合物を基にして最適化された、緑内障・高眼圧症を対象疾患とする開発品である。当社初となる自社臨床開発を行っており、2024年8月に米国後期第Ⅱ相臨床試験が終了。試験結果は良好で、本開発品の有効性が確認され、安全性に関して重篤な有害事象は認められなかった。

2026年3月25日に千寿製薬株式会社との資本業務提携が締結されたことを踏まえ、従来の米国に加え日本での開発を推進することになった。日本においても第Ⅲ相臨床試験から開始することを計画している。PMDAとの相談を通じて、これまで米国で実施してきた臨床試験データおよび第Ⅲ相臨床試験のために準備しているデータの活用可能性を確認するとともに、日本の規制要件に適合する各種試験および治験実施体制の構築等を進めることにしている。

開発形態	■ 自社開発
対象疾患・特徴等	■ 緑内障治療剤として、「第二選択薬のFirst Choice」を目指す ■ 作用点がPG関連薬（第一選択薬）と異なり、適度な効果と高い安全性を有し、安心して併用できる新薬として、ニーズと有望な市場がある
対象地域	■ 米国、日本（日本での上市を優先）
現状と今後の見通し	■ 2025年12月米国第Ⅲ相臨床試験に向けて、FDAとTypeCミーティング実施 ■ 2026年3月 千寿製薬と資本業務提携を締結 ■ 米国から日本の開発を優先することに変更 ■ 日本においても第Ⅲ相臨床試験から開始することを計画 ■ PMDAとの相談を通じて、これまで米国で実施してきた臨床試験データおよび第Ⅲ相臨床試験のために準備しているデータの活用可能性を確認するとともに、日本の規制要件に適合する各種試験および治験実施体制の構築等を進める
その他	■ 対象となる市場規模（推計）：日本 約885億円、米国 約30億ドル

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、有価証券報告書、決算説明資料よりSIR作成

② H-1129 (対象疾患：免疫異常を基盤とする角結膜疾患治療薬（非開示）)

本開発品は、プロテインキナーゼ阻害剤を中心とする当社化合物ライブラリーのシード化合物を基にして最適化された開発品である。2019年まで緑内障治療剤として開発を行っていたが、国内第Ⅲ相臨床試験にて開発中止となった。その後、知的財産の有効活用およびキナーゼ阻害剤のポテンシャル発揮の観点から、他疾患への適用を検討し、2025年7月、新たに免疫異常を基盤とする角結膜疾患治療薬としてパイプライン化。現在、臨床試験に向けた準備を進めている。

開発形態	■ 自社開発
対象疾患・特徴等	■ 免疫異常を基盤とする角結膜疾患治療薬
対象地域	■ 日本
現状と今後の見通し	■ 2012年 緑内障治療剤として開発開始 ■ 2019年 第Ⅲ相臨床試験で開始中止 ■ 2025年7月 角結膜疾患治療薬（リポジショニング）として開発決定 ■ PMDAに対して、第Ⅱ相臨床試験開始で相談、オーファン指定申請、治験薬製造 ⇒ 効率的な開発を目指す
その他	■ 対象疾患は、競合戦略上非開示

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、有価証券報告書、決算説明資料よりSIR作成

③ DW-5LBT（対象疾患：帯状疱疹後の神経疼痛、商品名：Bondlido）

本開発品は、イオン液体を利用した株式会社メドレックスの独自技術ILTS（Ionic Liquid Transdermal System）を用いた新規のリドカイン※テープ剤である。リドカインパップ剤Lidodermの市場をターゲットとし、さらなる新規市場への拡大も目指して開発した製品。メドレックスが帯状疱疹後の神経疼痛治療薬として開発を進め、DWTIは2020年に共同開発を開始した。その後、2025年9月に米国で承認取得し、販売提携先の選定のうえ、2026年下期に上市が予定されている（現時点で2026/12期の業績予想には織り込まれていない）。

※ 神経末端において痛みの信号を遮断することにより痛みを軽減させる、局所麻酔薬の一種。

開発形態	<ul style="list-style-type: none"> ■ 株式会社メドレックスとの共同開発
対象疾患・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ■ 帯状疱疹後の神経疼痛 ■ メドレックスの独自技術ILTSを用いた新規のリドカインテープ剤 ■ 少量（30%弱）のリドカインで同等の効果 ■ 皮膚刺激性が少ない、粘着力に優れる
対象地域	<ul style="list-style-type: none"> ■ 米国
現状と今後の見通し	<ul style="list-style-type: none"> ■ 2025年9月 米国で承認取得 ■ 販売パートナー候補と提携交渉中 ■ 2026年下期の上市を目指す ■ 上市後、メドレックスから成果分配金を受領（2026/12期の業績予想には織り込まれていない）
その他	<ul style="list-style-type: none"> ■ ブロックバスターであったLidoderm®（リドカインパップ剤、ピーク時売上10億ドル超過）の市場がターゲット

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、有価証券報告書、決算説明資料よりSIR作成

④ DWR-2206（対象疾患：水疱性角膜症）

本開発品は、水疱性角膜症を適応症とした再生医療用細胞製品で、培養ヒト角膜内皮細胞とROCK阻害剤を含有した懸濁液を前房内に注入し、角膜内皮の再生の治療に用いられる。アクチュアライズ株式会社が開発を進めており、DWTIは2022年に共同開発を開始した。DWTI初となる再生医療品であり、2024年3月に国内第II相臨床試験を開始し、2025年11月に被験者の観察期間が終了した。現時点において、安全性については、重要な有害事象および被験製品との因果関係が否定できない重篤な有害事象は発現しておらず、有効性については、視力改善が示唆されている。現在、データ解析を進めるとともに、第III相臨床試験の準備を進めている。

開発形態	<ul style="list-style-type: none"> ■ アクチュアライズ株式会社との共同開発
対象疾患・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ■ 水疱性角膜症（再生医療用細胞製品） ■ ヒト角膜内皮細胞を生体外で増幅培養し、Rhoキナーゼ阻害剤を含有した懸濁液を凍結した培養ヒト角膜内皮細胞凍結製剤 ■ 凍結製剤：融解したDWR-2206を前房内に注入し、角膜内皮の再生を行う治療法 ■ DWTI初の再生医療製品
対象地域	<ul style="list-style-type: none"> ■ 日本
現状と今後の見通し	<ul style="list-style-type: none"> ■ 2025年11月 被験者の観察期間が終了 ■ 日本：第III相臨床試験の準備 ■ 中国：当局相談実施、早期の治療開始を目指す
その他	<ul style="list-style-type: none"> ■ 第III相臨床試験以降のDWTIの開発費負担なし ■ DWR-2206 から得られる一切の収益は共同開発者として、DWTIも一定の割合で受領

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、有価証券報告書、決算説明資料よりSIR作成

⑤ K-321 (対象疾患：フックス角膜内皮変性症、リパスジルの適応拡大)

DWTIが発明したリパスジル塩酸塩水和物は、眼内にあるキナーゼに作用する可能性があることが示唆されており、適応拡大に向けた取り組みとして、フックス角膜内皮変性症（22頁参照）を適応症とした米国第II相臨床試験が2019年から開始された。その後、2022年に米国第III相臨床試験を開始、2023年に米国を含めたグローバル第III相臨床試験が開始された。被験者への投与は完了しており、経過観察が行われている。フックス角膜内皮変性症は病態の進行に伴い角膜内皮障害に至る。重度の視覚障害を有する角膜内皮疾患のこれまでの治療法は角膜移植であり、有効な治療薬の開発が望まれている。

2027年に米国で申請、2028年以降の承認、上市を目指している。

開発形態	<ul style="list-style-type: none"> ■ ライセンスアウト先：興和株式会社
対象疾患・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ■ フックス角膜内皮変性症 ■ DWTIが2022年12月に国内上市したグラアルファ®配合点眼液（対象疾患：緑内障・高眼圧症）は、リパスジル塩酸塩水和物（DWTI発明）とブリモニジン酒石酸塩を含有する世界で初めての組み合わせの配合点眼剤 ■ リパスジル塩酸塩水和物について、従来の緑内障からフックス角膜内皮変性症へ適応拡大を図る ■ DSO（デスメ膜剥離手術後）にリパスジル塩酸塩水和物を点眼することで術後の回復、視機能改善を行う
対象地域	<ul style="list-style-type: none"> ■ 全世界
現状と今後の見通し	<ul style="list-style-type: none"> ■ 2023年 グローバル第III相臨床試験（2試験）開始 ■ 2025年 2試験のうち1試験の観察期間完了 ■ すべてのグローバル第III相臨床試験の観察期間終了後、データ解析実施し、申請準備 ■ フックス角膜内皮変性症患者を対象に、まずは米国での上市を目指す ■ 米国での上市後は、欧州展開を検討
その他	<ul style="list-style-type: none"> ■ 患者数は欧州約160万人、米国約600万人と多いが、既存の治療薬がない ⇒ 製品大型化の可能性 ■ ライセンスアウト先の興和にて開発推進、DWTIの資金負担なし ■ 上市後、データ保護期間終了までロイヤリティを受領

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、有価証券報告書、決算説明資料よりSIR作成

⑥ DW-1002 (眼科手術補助剤、BBG)

眼科手術補助剤とは、眼の手術の際に使用する薬剤。眼球は直径約24mmと小さく、繊細な手術操作が必要。視認が困難な組織を可視化することで、手術を安全に行う。DW-1002の主成分は、九州大学の研究グループが発見したBBG250（Brilliant Blue G-250）という染色性の高い色素である。DWTIは、独占的ライセンス（特許権者は九州大学）に基づき開発を進めた。この開発品は、眼内にある内境界膜または水晶体を保護するカプセルを一時的に安全に染色し、硝子体・白内障の手術を行いやすくするものである。

日本以外の全世界向けの独占的なサブライセンスをDORCに付与しており、DORCは2010年から欧州等において、ILM-Blue®、MembraneBlue-Dual®の製品名で製造・販売している。2020年には米国においても単剤であるTissueBlue™の販売を開始した。配合剤については、内境界膜および網膜上膜染色を対象に米国でオーファンドラッグ指定を受け、現在承認申請に向けて準備を進めている。なお、2025年12月の特許満了に伴い、米国以外のロイヤリティは終了している。

国内については、わかもと製薬株式会社に独占的ノウハウライセンス条項付製品供給契約を付与している。わかもと製薬は硝子体手術時の内境界膜染色、白内障手術時の水晶体前嚢染色を対象として、製造販売承認の取得に向けて開発を進めている。なお、2025年12月に日本の特許は満了している。

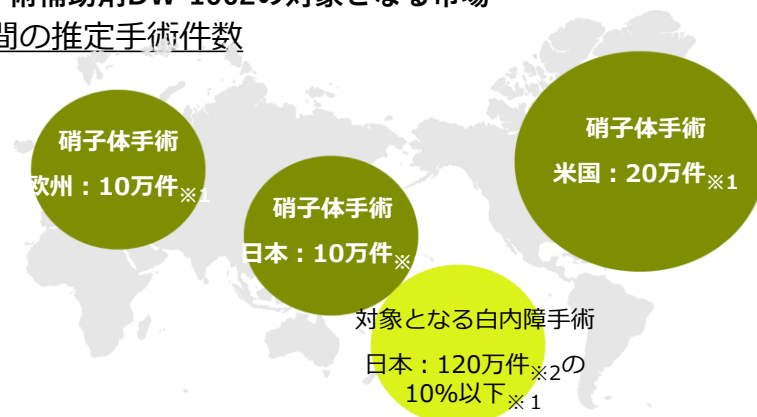
現在、日本では単剤として、米国では配合剤として申請に向けた準備を実施。日本では米国承認データの利用について規格・品質に関する課題をPMDAに相談中。2026/12期中に、日本、米国それぞれで承認申請が予定されており、2027年以降の承認、上市を目指している。

開発形態	<ul style="list-style-type: none"> ■ 上市品 ■ ライセンスアウト先（日本を除く全世界）：DORC ■ ライセンスアウト先（日本）：わかもと製薬株式会社
対象疾患・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ■ 主成分：BBG250（Brilliant Blue G-250）とする眼科補助剤 ■ BBG250は染色性の高い色素。眼内にある内境界膜等を一時的に安全に染色し、硝子体・白内障の手術を補助 ■ 2017年に事業譲受、特許権者は九州大学 ■ 単剤：内境界膜染色、水晶体前嚢染色 ■ 配合剤：内境界膜、網膜上膜および増殖硝子体網膜症における増殖膜染色 ■ 欧州・米国等76の国・地域で上市
対象地域	<ul style="list-style-type: none"> ■ 全世界
現状と今後の見通し	<ul style="list-style-type: none"> ■ 日米ともに申請に向けた準備を実施、2026年中の承認申請を実施予定 ■ 日本（単剤）：第III相臨床試験が終了、米国承認データの利用について、規格・品質に関する課題をPMDAと相談中 ■ 米国（配合剤）：FDAより小規模試験実施の指示あり、実施中
その他	<ul style="list-style-type: none"> ■ 一定の実施料を九州大学に支払う ■ 開発やライセンスアウトの進展等に伴い、譲受元にマイルストーンの支払可能性あり ■ 開発費（日本を除く全世界）：DORCが全額負担 ■ 開発費（日本）：一部DWTI負担、それ以外はわかもと製薬負担 ■ ライセンスアウト先からはロイヤリティを受領 ■ 特許満了国のロイヤリティ終了（日本は製品供給契約のためロイヤリティは継続される） ■ 競合品はない

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、有価証券報告書、決算説明資料よりSIR作成

眼科手術補助剤DW-1002の対象となる市場

年間の推定手術件数



※1：当社調べ（関係者等へのヒアリングによる）

※2：令和元年社会医療診療行為別統計,厚生労働省,令和元年6月審査分

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

⑦ DW-1001 (対象疾患：非開示)

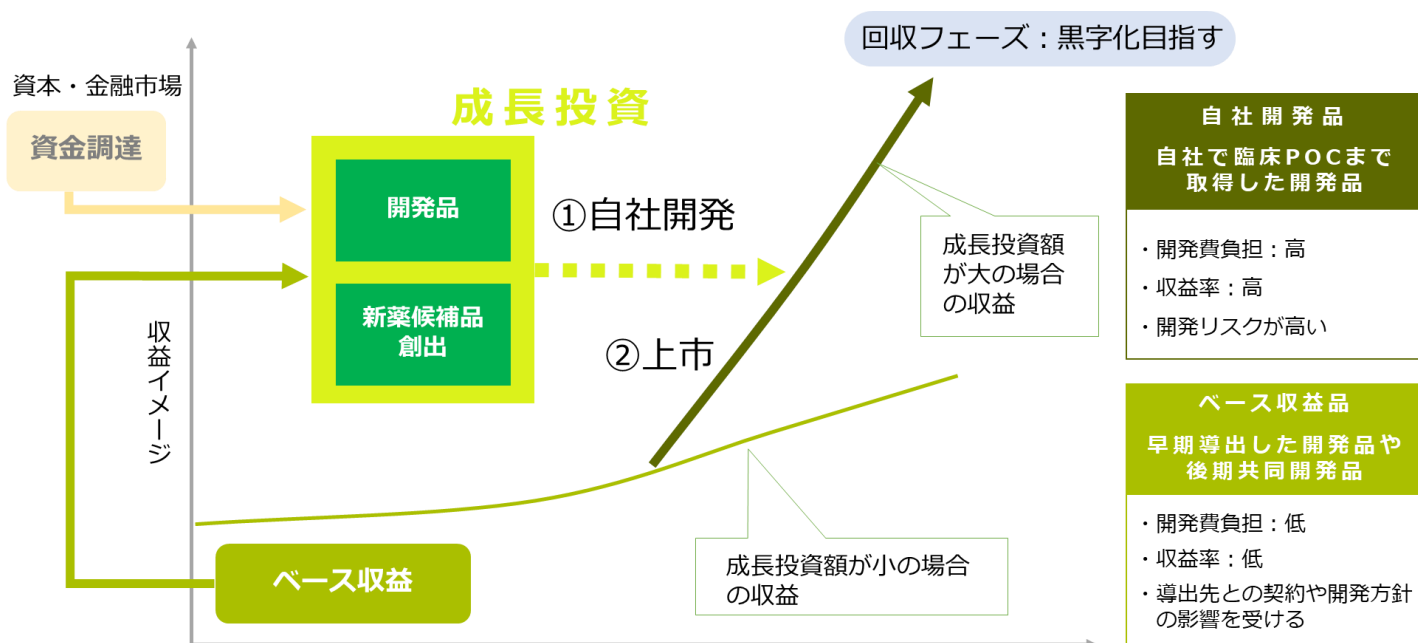
本開発品は、2015年に英国企業から導入した眼科用治療剤である。他の疾患を適応症として既に市販されている化合物について、眼科への適応拡大を目指す、リポジショニングでの開発を目指している。開発のコスト並びにリスクは相対的に低くなることが期待される。

2019年に日本における独占的実施権をロート製薬株式会社にライセンスアウトした。ロート製薬では、非臨床試験を進め、2022年に国内第1相臨床試験が良好な結果で終了した。

開発形態	<ul style="list-style-type: none"> リポジショニング ライセンスアウト先：ロート製薬株式会社
対象疾患・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> 眼科用治療剤（詳細はライセンスアウト先の方針により非開示） 他の疾患を適応症として既に市販されている薬剤について、眼科疾患に応用しているドラッグリポジショニングのパイプライン
対象地域	<ul style="list-style-type: none"> 日本
現状と今後の見通し	<ul style="list-style-type: none"> 2015年6月 英国企業より再実施許諾権付独占的開発権・製造権・販売権を取得する契約を締結 2019年12月 ロート製薬へ眼科領域における局所的使用についてライセンスアウト 国内第1相臨床試験が終了
その他	<ul style="list-style-type: none"> 開発費はロート製薬が負担 マイルストーン、ロイヤリティを受領

出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」、有価証券報告書、決算説明資料よりSIR作成

成長投資と収益イメージ



出所：同社「事業計画及び成長可能性に関する事項」

株価インサイト

株価推移

同社の株価は昨年9月25日に前日比ストップ高の158円をつけた。これは、同日に発表された神経疼痛治療薬DW-5LBT（商標名：Bondlido）の米国における販売承認取得」のプレスリリースを好感したものである。ただ、この株価上昇は一時的で、その後は100円前後で株価は推移している。

短期的な業績で考えた場合、2024年9月のグラナテック®（単剤、国内）、2025年12月のBBG（米国以外）、2025年のグラナテック®（海外）と、相次ぐロイヤリティ終了で、売上高が減少傾向となっている。一方で、2026年下期に上市が予定されている上記のDW-5LBTについては、現在のところ2026/12期の業績予想に織り込まれておらず、業績についてロイヤリティ減少が先行している状況である（パイプライン収入の比率はきわめて少ない）。

DWTIは「キナーゼ阻害剤のパイオニア」であり、自社発明の上市薬を有する数少ない創薬ベンチャーである。2026年以降、毎年1製品の上市を計画している。この計画は、同社のキナーゼ阻害剤の可能性に裏打ちされた「創薬エンジン（新薬を継続創出できる当社の基盤技術）」によるものである。

2025年7月、同社は新規パイプラインとしてH-1129の開発を決定した。また、2026年3月には、千寿製薬株式会社と資本業務提携を締結し、米国向けに開発していたH-1337について、日本でも開発を進めることとなった（日本での上市を優先）。H-1337は緑内障治療剤であり、対象となる患者数は日本では推定400万人で米国の同420万人とほぼ同水準で市場性は高い。また、DWR-2206やK-321など既存の治療薬がなく製品の大型化が期待できる角膜内障害に対する治療薬の開発パイプラインも有している。こうした市場性の高いパイプラインを有しており、また、第Ⅲ相臨床試験の成功確率が高い眼科領域に特化しているのが、DWTIの強みである。

現在は、開発費用先行の業績となっているが、上市が計画どおり進捗すれば、創薬ベンチャーとしての投資家の期待がさらに高まり、株価に反映されていくものとSIRでは考える。

株価推移（2025年1月～）



出所：SPEEDAデータよりSIR作成

Appendix

損益計算書

(単位：百万円)

決算期	16/12期	17/12期	18/12期	19/12期	20/12期	21/12期	22/12期	23/12期	24/12期	25/12期	26/12期
	(会予)										
売上高合計	168	254	293	581	356	414	448	428	472	388	300
売上原価合計	6	7	14	26	17	20	28	37	47	39	
売上原価	6	7	14	26	17	20	28	37	47	39	
売上総利益	162	247	279	555	339	394	421	392	425	349	
売上総利益率	96.4	97.2	95.2	95.5	95.2	95.2	94.0	91.6	90.0	89.9	
販売費及び一般管理費	482	880	1,066	437	604	566	726	1,190	1,634	969	
営業利益	-320	-634	-786	117	-266	-172	-306	-799	-1,210	-620	-780
営業利益率	-	-	-	20.1	-	-	-	-	-	-	-
営業外収益	25	1	1	1	3	18	38	7	2	10	
受取利息配当金	3	1	0	0	0	0	0	0	0	2	
営業外費用	10	36	11	8	26	6	28	5	21	21	
支払利息割引料		5	6	6	5	4	3	2	5	9	
持分法投資損益- 営業外											
経常利益	-304	-669	-797	110	-290	-160	-296	-796	-1,228	-630	-800
経常利益率	-	-	-	18.9	-	-	-	-	-	-	-
特別損益		-937	-5				-144	-30	-61		
特別利益		103	2								
特別損失		1,040	7				144	30	61		
税金等調整前当期純利益	-304	-1,606	-802	110	-290	-160	-440	-827	-1,289	-630	
税引前利益率	-	-	-	18.9	-	-	-	-	-	-	-
法人税等	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
法人税等 - 当期分	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
法人税等調整額 - 繰延分											
親会社株主に帰属する当期純利益	-254	-1,563	-749	133	-276	-149	-430	-812	-1,290	-632	-800
当期純利益	-306	-1,608	-804	108	-291	-161	-442	-828	-1,290	-632	
非支配株主に帰属する当期純利益	-53	-44	-55	-25	-15	-12	-12	-16			
親会社株主に帰属する当期純利益率	-	-	-	22.9	-	-	-	-	-	-	-

出所：SPEEDAよりSIR作成

注：SIRでの財務データ処理は短信規定と異なるため記載数字は会社資料と相違することがある。

貸借対照表

(単位：百万円)

決算期	16/12期	17/12期	18/12期	19/12期	20/12期	21/12期	22/12期	23/12期	24/12期	25/12期
資産合計	2,913	2,877	2,074	1,981	2,738	2,463	2,956	2,373	1,669	2,169
流動資産	2,776	2,516	1,764	1,716	2,503	2,162	2,659	2,138	1,475	2,020
現金同等物及び短期性有価証券	2,645	2,133	1,584	1,541	2,308	1,934	2,335	1,867	1,126	1,710
現金及び現金同等物	2,292	2,133	1,584	1,541	2,308	1,934	2,335	1,867	1,126	1,710
売上債権	41	61	71	104	92	102	171	117	125	95
受取手形										
棚卸資産	58	46	59	59	58	88	79	88	102	87
製品・商品										
繰延税金資産 - 流動										
貸倒引当金 - 流動	-6									
固定資産	136	362	309	266	234	301	297	235	194	149
有形固定資産	25	15	5	3	5	5	10	10	11	9
土地										
建設仮勘定										
無形固定資産	1	330	292	250	208	167	125	87	44	2
投資その他の資産	110	16	13	13	21	129	163	139	138	138
投資有価証券(関係会社含む)	101	11	5	5	13	123	154	142	143	143
投資有価証券	101	11	5	5	13	123	154	142	143	143
長期貸付金										
繰延税金資産 - 固定										
貸倒引当金 - 固定		-6						-11	-13	-12
負債合計	36	782	774	573	574	428	1,083	1,094	936	734
流動負債	36	156	268	189	210	193	211	194	133	204
買入債務										
短期借入債務			120	120	120	130	120	10	19	99
短期借入金(リース債務含む)										
一年内返済の長期借入債務			120	120	120	130	120	10	19	99
一年内返済の長期借入金			120	120	120	130	120	10	19	99
一年内償還社債										
前受金										
資産除去債務 - 流動										
固定負債		625	505	384	364	234	872	900	803	530
長期借入債務		600	480	360	340	210	848	876	779	506
長期借入金(リース債務含む)		600	480	360	340	210	113	269	476	506
社債									303	
繰延税金負債 - 固定										
退職給付/給与引当金										
資産除去債務 - 固定										
純資産合計	2,877	2,096	1,300	1,408	2,164	2,035	1,873	1,280	734	1,435
株主資本等合計	2,738	2,001	1,260	1,393	2,164	2,007	1,857	1,280	734	1,435
株主資本	2,723	1,999	1,260	1,393	2,161	2,004	1,857	1,279	732	1,435
資本金	2,945	3,365	35	35	557	573	714	832	1,203	697
資本剰余金	2,935	3,355	2,133	2,133	2,656	2,631	2,772	2,890	3,262	1,281
利益剰余金	-3,157	-4,721	-908	-775	-1,051	-1,200	-1,630	-2,442	-3,733	-544
自己株式								0	0	0
評価・換算差額							0	0	0	0
その他有価証券評価差額金							0	0	0	0
為替換算調整										
非支配株主持分	139	95	40	15		28	16			

出所：SPEEDAよりSIR作成

注：SIRでの財務データ処理は短信規定と異なるため記載数字は会社資料と相違することがある。

キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

決算期	16/12期	17/12期	18/12期	19/12期	20/12期	21/12期	22/12期	23/12期	24/12期	25/12期
営業活動によるキャッシュフロー	-334	-797	-540	176	-216	-176	-355	-587	-1,299	-494
減価償却費及び正ののれん償却費	18	45	52	44	44	45	46	49	49	48
減価償却費	18	45	52	44	44	45	46	49	49	48
有価証券及び投資有価証券評価損益							100	13		
有価証券及び投資有価証券売却損益		-101								
投資有価証券売却損益		-101								
有形固定資産売却損益										
利息及び配当金の受取額	4	3	0	0	0	0	0	0	0	2
利息の支払額		-7	-6	-6	-4	-4	-3	-2	-5	-9
投資活動によるキャッシュフロー	-231	-763	-8	-100	-13	-111	-140	-15	-10	-2
有価証券及び投資有価証券の取得	-783				-8	-109	-130			
投資有価証券の取得					-8	-109	-130			
有価証券及び投資有価証券の売却		202								
投資有価証券の売却		202								
関係会社株式の取得										
有形固定資産の取得及び売却	-37	-4	-6		-5	-2	-10	-12	-9	-3
有形固定資産の取得	-37	-4	-6		-5	-2	-10	-12	-9	-3
有形固定資産の売却			0							
無形固定資産の取得及び売却	0	0	-5		0	-1	0	-3	-1	
無形固定資産の取得	0	0	-5		0	-1	0	-3	-1	
財務活動によるキャッシュフロー	1,067	1,407		-120	1,004	-104	867	134	568	1,080
短期借入による収入										
短期借入金の返済										
長期債務の増加		582			100		913	166	886	135
長期借入による収入		582			100		13	166	226	135
社債の発行							900		660	
長期債務の返済				-120	-120	-120	-120	-120	-1,034	-328
長期借入金の返済				-120	-120	-120	-120	-120	-10	-25
社債の償還									-1,024	-303
株式の発行	1,071	825			1,023	16	89	89	710	1,268
株式の償還及び消却								0		
支払配当金										
現金及び現金同等物に係る換算差額	23	-6	0	1	-7	17	28	0	0	0
現金及び現金同等物の増加額	525	-159	-548	-43	767	-374	401	-467	-741	584
現金及び現金同等物期首残高	1,767	2,292	2,133	1,584	1,541	2,308	1,934	2,335	1,867	1,126
現金及び現金同等物期末残高	2,292	2,133	1,584	1,541	2,308	1,934	2,335	1,867	1,126	1,710
フリーキャッシュフロー	-565	-1,560	-548	76	-229	-287	-495	-602	-1,309	-496

出所：SPEEDAよりSIR作成

注：SIRでの財務データ処理は短信規定と異なるため記載数字は会社資料と相違することがある。

ディスクレーマー／免責事項

本レポートは対象企業についての情報を提供することを目的としており投資の勧誘や推奨を意図したものではありません。本レポートに掲載されたデータ・情報は弊社が信頼できると判断したのですが、その信憑性、正確性等について一切保証するものではありません。

本レポートは当該企業からの委託に基づきSESSAパートナーズが作成し、対価として報酬を得ています。SESSAパートナーズの役員・従業員は当該企業の発行する有価証券について売買等の取引を行っているか、または将来行う可能性があります。そのため当レポートに記載された予想や分析は客観性を伴わないことがあります。本レポートの使用に基づいた商取引からの損失についてSESSAパートナーズは一切の責任を負いません。当レポートの著作権はSESSAパートナーズに帰属します。当レポートを修正・加工したり複製物の配布・転送は著作権の侵害に該当し固く禁じられています。



SESSAパートナーズ株式会社

東京都港区麻布十番2-8-14 i-o Azabu 5a
info@sessapartners.co.jp